

令和7年度 学校評価報告書 (目標設定 **実施結果**)

視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (2月20日実施)	総合評価 (3月31日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<p>①効果的な学習活動・進路活動を実践できるような教育課程を編成する。</p> <p>②生徒が主体的に学ぶ意欲を高めることをめざした授業を実践し、生涯をととして学び続ける資質・能力の育成を行う。</p>	<p>①効果的な学習活動につなげるため、指導と評価の一体化への取組の理解を深める。</p> <p>②生徒の主体的に学ぶ意欲や力を高めるために、授業改善や家庭学習の定着を目指す。</p>	<p>①・学習評価について、教科横断的な評価方法の定着を図る研修会を実施する。</p> <p>・「生徒による授業評価」を実施し、授業改善のポイントを分析する。</p> <p>②家庭学習調査を年2回実施し、生徒の家庭学習について分析する。</p>	<p>①・研修会を通じて評価方法の定着が図られたか。</p> <p>・「生徒による授業評価」において、1回目より2回目の方が向上したか。</p> <p>②家庭学習をしている生徒が増えているか。家庭学習が定着するための方法を分析できたか。</p>	<p>①・評価方法の定着や授業改善をめざし、テーマを設定したうえでの授業観察や授業見学会、研修会を実施した。教育ICTツールを活用した授業づくりや生徒の深い学びについても共有し、学習評価の在り方について理解を深めた。</p> <p>・「生徒による授業評価」では1回目より2回目ですべての項目において0.01～0.02%の向上が見られた。9割ほどの生徒が能動的な学びができたことと回答した。</p> <p>②家庭学習調査を2回実施した。3学年では進路が決定してからの勉強時間が「減った」と回答している生徒が増えていることや全体では「復習」を重視している生徒が比較的多いことが分かった。</p>	<p>①・来年度は指導要領の改訂に向けた答申がまとまる方向にあるため、評価方法の定着に加え、新たな指導要領への理解を深めるための教科会・研修会を行いたい。</p> <p>・日々の授業改善やICTツールの活用により、学習内容の共有や生徒の発表の機会を増やしていきたい。</p> <p>②生徒の卒業後のさらなる飛躍に向け、学び続けることの意義を意識できるような指導・支援を検討し、平日の学習時間が極端に少ない生徒に対しては、少しずつでも毎日机に向かう習慣をつける指導を工夫する。</p>	<p>①・評価を意識して指導することと教師の指導方法の工夫（ICTツールの活用など）が生徒の能動的な学びにつながっている。学習指導要領の改訂があっても、授業ごとの目標一指導一評価の一体化が指導の質の向上に生かされると思う。</p> <p>・ロイロノート等のICTツールの活用が授業づくりや生徒の深い学びにどのような効果があったかを問うような質問項目を設けると改善目標が具体化されると思う。</p> <p>②生徒が家庭学習に取り組むことで小テストや定期試験で成果が表れることや評価が上がることを実感できるように、教職員が課題を明確かつ共有する必要がある。生徒の家庭学習時間が増加する具体策を実施することが重要だ。</p>	<p>①・職員研修会でロイロノートを使用し、使い方の理解を深めることで、授業でロイロノートを活用する頻度が上がった。また、生徒の学習活動のどの部分かをどのように評価するかについて、具体的な観点で他教科と共有することができたので、自教科の評価方法などを見直すことにつながった。</p> <p>②生徒の家庭学習の現状を把握できた。3学年では、進路が決定した後も学習に対するモチベーションを保てるような働きかけが課題である。</p>	<p>①評価の付け方については、教科内で振り返りを共有したうえで、教科横断的なブラッシュアップを目指す。また、授業改善の取組やICTツールの活用が、生徒の深い学びにどのような効果があったかを検証する。</p> <p>②生徒の家庭学習等の時間を増やすために、進路実現の視点からの指導と定期試験前の勉強会などを推進するなど、家庭学習の動機づけを多角的に実践できる工夫をリストアップし、共有する。</p>
2 (幼児・児童・) 生徒指導・支援	<p>①生徒の基本的な生活習慣の確立と集団生活の基本的なルール・マナーを守る意識を育む。</p> <p>②生徒同士が主体的にかかわり合い相互理解を深めるインクルーシブな学校づくりに取り組む。</p>	<p>①交通マナーを遵守しようとする意識を養う。</p> <p>②安心・安全な部活動運営を心がけ、生徒間の相互理解を指導・支援する。</p>	<p>①警察やドライビングスクールなどの外部機関と協力して交通安全教室を行い、事後アンケートを実施する。</p> <p>②活動時間や部室の管理体制等のルールを守った部活動運営を行うことができるよう「部活動総点検」を実施し、活動の在り方を検証する。</p>	<p>①・交通安全教室事後アンケートにより、交通マナーを守る意識を高めることができたか。</p> <p>・登下校に係る苦情件数を前年度より減らすことができたか。</p> <p>②活動の在り方の確認や施設の安全点検をとおして、部の目標の実現に向けた生徒間の相互理解を育むことができたか。</p>	<p>①・警察やドライビングスクールなどの外部機関と連携し、交通マナーを守ろうという意識を高めることができた。</p> <p>・今年度の自転車通学への指摘件数は17件となり、昨年度の11件から増加してしまった。</p> <p>②「部活動総点検」を実施したことで、顧問と生徒の相互で施設の安全性に対する意識が高まり、部活動運営に係る相互理解を深めることができた。</p>	<p>①・引き続き専門機関と連携し、交通マナー順守の指導を実施する。</p> <p>・生徒は交通ルールについて理解しているものの、登下校時に自転車に乗る場面では交通ルールを守れない現状があるので、繰り返しの呼びかけや交通安全説明会を計画する。</p> <p>②部活動等の安心・安全な活動を促す「点検シート」等を作成し、定期的にチェックできるようにする。</p>	<p>①・道路交通法の改正があることから、継続した交通安全指導は重要だ。様々な視点から対策を講じるとよい。</p> <p>・近隣からの自転車通学への指摘内容を集約し、指導のポイントを具体的に絞り、近隣住民の要望に応じるべきだ。</p> <p>②安心・安全な運営については、他者の視点や海外の取組との比較的視点に目を向けるなど、客観的な視野を広げて多様なアプローチを心がけるとよい。</p>	<p>①交通マナーについては外部機関との連携により意識啓発はできたが、日常の登下校の場面では十分に実践できているとはいえない。生徒が、知識として理解しているルールを実践できる方策を考えたい。</p> <p>②「部活動総点検」の実施で取組の良い点、改善点を明確にした。生徒間の相互理解を深めるために、定期的に点検する。</p>	<p>①・警察、交通安全協会やドライビングスクールと連携し、実技を伴う安全講習（模擬道路体験など）を実施する。保護者向けに交通安全に関する案内や注意喚起を定期的に配信する。</p> <p>・三者面談などの機会に自転車通学のルールを確認し、保護者を含めて共通理解を図る。</p> <p>②「部活動総点検」を定期的実施することで、生徒の取組や行動の変化を読み取れるようにするための具体案を示す。</p>

視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (2月20日実施)	総合評価(3月31日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3 進路指導・支援	①生徒一人ひとりの個の力を生かした進路実現・自己実現の支援に取り組む。 ②体験的な学習やキャリア教育・シチズンシップ教育等の機会を充実させ、組織的な進路指導・支援を行う。	①総合的な探究の時間を通じて、適切な進路活動を行えるよう支援する。 ②政治参加型教育の充実を図る。	①・進路ガイダンスや実力テスト、上級学校訪問やインターンシップ等の振り返りを行い、計画的な進路活動を支援する。 ・卒業後のアフターフォローの体制を整える。 ②模擬投票等を実施する。	①・様々な活動をとおして進路活動への意欲を高めることができたか。 ・卒業後のアフターフォロー体制を構築することができたか。 ②政治や社会に参画しようとする意識を高めることができたか。	①・学級閉鎖により、1年生の上級学校訪問については十分な効果をえられなかった。インターンシップと「保育の仕事」講座の参加者は増えた。実力テストの見直し後は総合型選抜が増え、より多様な進路を選択するようになった。 ・卒業学年と進路支援グループが検討し、卒業後のアフターフォロー体制を確認した。 ②投票率が思うように伸びなかった(5%)が、3年の金融教育については内容を見直し、生徒の興味を引き出すことができた。	①・上級学校訪問の時期や訪問先の設定を再考し、より多くの分野の開催を計画する。 ・卒業生の進路相談や調査書の発行について適切な支援を行う。 ②総合的な探究の時間を通じて、政治等への興味・関心の向上を促す。	①他機関と協働して進路支援を実施した効果を踏まえ、今後の支援方針を作成することを期待する。また、適切な進路支援を行うためには、教科カリキュラムに加え、総合的な探究の時間や教科横断的な視点での進路支援が必要だ。 ②模擬投票や金融教育の取組内容を具体的に明確にし、継続して実施してほしい。	①他機関からの情報を得ることで、生徒たちが進学・就職の両面から卒業後のイメージをつくることができた。その一方で、受験状況の変化に伴い有効な進路活動をおこなえない生徒も存在した。進路希望の分野に応じて、計画的で細かな支援の必要性を感じた。 ②模擬投票に取り組むことからの投票率が低かった。総合的な探究の時間においても政治への参画意識が上がるような学習内容を計画することが課題である。	①特に3学年においては、進路支援に係る計画と分野別または個別の進路情報や効果的な進路支援について、学年内の教員を中心に、日常的に情報共有することと、受験形態に応じて多くの教職員の経験や指導力に期待し、志望理由書や面接練習の対応を体系化して実施する。 ②教科横断的に現在の社会情勢や生徒が身近に感じられる社会事象について、生徒の興味・関心を引き出すアプローチを考える。
4 地域等との協働	①インクルーシブな学校づくりのために、支援学校や地域の施設や企業と連携する。 ②地域との様々な協働を模索し、生徒組織による活動発信や広報活動の充実を図る。	①外部機関と連携し、よりよい学校生活に向けた取組を推進する。 ②・地域と連携した防災訓練や美化活動を実施し、地域貢献の機会を確保し生徒の公共心を涵養する。 ・学校行事における地域の教育機関等との交流機会を設定する。	①学校生活に不安を感じる生徒等について、専門機関との連携を図る。 ②・防災訓練の際に消防署の指導を受ける。 ・地域の清掃活動を実施する。 ・修学旅行における他校との交流や地域の中学校等との活動交流を図る。	①専門機関を活用し、生徒の状況に対する適切な支援を実践できたか。 ②・地域特性を踏まえ、具体的な知識・技術を学ぶことができたか。 ・定期的・組織的な地域清掃を実施できたか。 ・学校行事等での連携活動の機会を5回以上実施することができたか。	①SCやSSW、特別支援学校と連携して様々な角度から生徒の支援を行った。 ②・防災訓練では、宮前消防署の指導を受け、避難経路の確保の重要性を学んだ。修学旅行では、現地の震災学習に照らして、川崎市内でおこりうる災害について学習した。 ・地域清掃を各学年2回ずつ実施した。 ・修学旅行での現地高校生との交流、体育祭・文化祭における支援学校との共同開催、中学校の部活動との交流練習会など10回の連携活動を実施した。	①支援が必要な生徒を早く発見するしくみや体制づくりを行う。 ②・地震防災に限らず、災害全般について危機管理の意識と技術を身につけられるよう、防災学習の内容を工夫する。 ・地域清掃を契機に、身の回りの美化についての意識を高める。 ・今年度実施した協働体験を次年度も継続して行い、生徒が主体的に取り組むような工夫を考え、本校の特色として定着を図る。	①学校以外の機関や専門家等との連携では、まず、学校側の役割や機能を明確にしておくことが重要だ。そのうえで、生活支援や教育相談、防災活動、交流活動などの目的を定めて、それぞれの教育的資源を最大限活用する工夫ができるとよい。 ②修学旅行先での交流や防災学習はとても意義ある体験になると思う。学校側が困っているようなことを声にあげ、情報を共有しながら地域と連携した防災訓練も工夫するとよい。	①複数の専門職と連携している一方、校内での情報収集・共有の流れが確立していない所がある。サポートデスクを十分に活用できているか検証が必要である。また、特別募集の生徒に対する支援についても発信していく。 ②・防災訓練では各HR教室からグラウンドへ避難し、移動時に遭遇する危険や留意すべき点を確認した。 ・修学旅行では災害の脅威を実感したうえで、平時の対策の重要性を認識した。	①SCやSSW、特別支援学校との校内ケース会議を定期的で開催し、情報共有と支援方針を統一する。出欠状況、成績面、生活面の変化などをデータとして共有し、支援が必要な生徒を客観的に把握する。 ②・教員の管理下にならないタイミングで災害にあった場合の対応を学ぶ機会を設ける。 ・地域の清掃活動に参加するなど、地域の方と協働する活動を検討する。
5 学校管理 学校運営	①インクルーシブ教育の視点から安心・安全な教育環境の整備をすすめる。 ②働き方改革を推進し、教職員が生徒と向き合う時間を確保することで信頼される学校づくりをめざす。	①ユニバーサルデザインの徹底に向け、備品の適切な配備・整備に努める。併せて、清掃の充実を図る。 ②安心・安全な学習環境づくり、職場環境づくりを進める。	①・施設・備品の現況を把握し、過不足を調整する。 ・ごみの分別に向けた意識の涵養に取り組む。 ②校内の施設工事等に伴う施設間の移動の改善や職員室内の改善を図る。	①・ユニバーサルデザインに基づく教育環境の整備が進んだか。 ・ごみの分別が徹底されたか。 ②施設間の移動時間が短縮され、安心・安全に授業や行事、部活動を実施することができたか。	①・昨年度より導入された大型電子黒板の活用が進んだ。 ・ごみの分別について、日常的に意識の涵養を図った。 ②職員室のリニューアル(オフィス改善事業)を実施し、動線を改良した。また、備品等を点検し、老朽化が進んでいる備品を廃棄し、授業や行事、部活動を安心・安全に実施することができた。	①・故障が多い大型電子黒板の使用法の改善をはかる。 ・文化祭時等を含め、ごみの絶対量が多いので、ごみ削減の意識を高める。 ②悪天候や当人の負傷などの状況により、施設間の移動に困難が生じることがあるので、新歩道橋の運用開始時には、集団で移動する際の動線を考慮する。	①老朽化した校舎や体育館などの施設や設備の整備と新しい機器類が併存する職場環境の中で、物事の管理を進めていくことのむずかしさがあると思う。生徒の安心・安全のため、全職員の創意工夫による環境整備が必要だ。 ②オフィス改善の成果を整理し、働きやすい環境づくりを進めてほしい。	①・文化祭ではごみの量が事前の想定を上回り、依頼したコンテナに積み切れなかった。特に段ボール類の削減には至らなかった。 ②オフィス改善事業によって職員室の什器を総入れ替えし、収納物の整理整頓を進めた。	①・お化け屋敷企画の数を抑制することで段ボールに頼らない装飾を奨励するなど、文化祭の企画段階から廃棄物削減を追求する。 ②整頓された状態を維持するため、恒常的な点検とペーパーレス化の推進に取り組む。

